書評

Jean GRENIER
Absolu et choix
Quimper : Calligrammes、1986 年、115 頁

毎床 玲音*

1. はじめに

一冊のアンカット本がある。

初めてそれに触れたとき、ハサミで切って悲惨な状態になったことがある。定規で切っても同じように上手く切れない。ようやくペーパーナイフという存在を知り、慎重にかつ丁寧に折丁を切り開けるようになる。

本書『絶対と選択 *Absolu et choix*』(1986) も、まさしくアンカット本だった。しかし、この手元にあるのは絶版の古書であるから、自分で切り開く必要はない。すでに誰かが切りひらいている。その誰かが切り拓いた歴史を辿るように最初の頁をめくると、ある言葉が我々の目に飛び込んでくる。

> 哲学的感覚、それは距離感だ。――「我々はこの世界内には存在しない」、そのような感覚こそが哲学を始動させる最初の思考(パンセ)である。(7) (1)

ランボー『地獄の一季節』(1873) の詩を引用しながらそう語ってみせるのは、ジャン・グルニエ (Jean GRENIER, 1898-1971) その人である。

ジャン・グルニエ、本名カミーユ = ジャン = シャルル・グルニエは、フランスのパリに生まれる。母親の故郷サン = ブリウーで育ち、のち 1936 年に『ジュール・ルキエの哲学』でパリ大学の博士号 (哲学) を取得。

作家アルベール・カミュ (Albert CAMUS, 1913-1960) とは、旧・フランス領アルジェのリセ・ビュジョー・ダルジェ時代からの教え子であり、生涯の友人でもあった。哲学教師であったグルニエが青年期のカミュに「様々な影響を与えた」とされるが、その内実は未だ明らかにされていない部分もある。

様々な顔を持つグルニエは、時には哲学書を、時にはエセーを、時には美学にかんする本を出版している。その多彩さは、著作数からも明らかである。

* 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程人間科学専攻［共生学系未来共生学講座共生の人間学］ 1 年 (M1) ; u476463b@ecs.osaka-u.ac.jp

また、グルニエはガリマール社の『N・R・F』誌への寄稿の古参でもあった。

2. 本書の梗概

本書『絶対と選択』は、1941 年パリのフランス大学出版局（P.U.F.）から『選択 *Le choix*』の題で出版された本(2)を基にした改題新版本である。

『選択』は 1961 年に同じく P.U.F.から『絶対と選択』に改題して第二版が、1970 年には改訂第三版が、グルニエの死後にあたる 1986 年には出版元をカンペールのカリグラム社に変えてさらなる改版本が出版された。本稿で主として参照したのはその 1986 年版である。

版ごとに、とりわけ初版と第二版との間には、異同が少なからず存在するが、内容に大きな差はない。第二版には本書全体の論旨をまとめた「補遺」が追録されていたが、1986 年版では削除されている。

本書は、三部から成る。

まず第一部「絶対と選択」では、「自由」の問題にかんして、「絶対」という観念から出発し、存在論的な平面（プラン）で論じようと試みる。というのも、グルニエは、「絶対」が思考（パンセ）の基本原理を成していると考えている。そのため、これまで心理学的、道徳的、神学的、科学的な平面で論じられてきた古今東西の哲学・思想を本書の全体を通して何度も批判的・懐疑的に参照する。その対象範囲は、古代ギリシアやインド、仏教、イスラーム、中国の道から、アリストテレスやレンブラント、スピノザ、ベルクソン、ハイデッガー、マルセル、ジャンケレヴィッチまでと非常に幅広い。また、思考が何に基づいているのか、ヨーロッパの思想とインド・中国の思想とを対比し、いわゆる「西洋哲学」にあるとする「思考の対象化」に対する疑問を投げ掛ける。

そこから第二部「絶対と世界」では、思考は「絶対」を前にして、どのようにすれば自由になれるのか。あるいは、思考に限りがあるとしたら、どのようであるのか。グルニエは「無（アン）―差異（ディフェランス）」をキーワードに検討していく。

「世界は無であり、しかし有である」（*Ibid.*:50）と述べるグルニエは、世界は無であって有でないように振る舞う思想や、有であって無でないように振る舞う思想に言及し、それに対する疑問をやんわりと投げ掛ける。あくまでもグルニエは懐疑主義的なスタイルを貫き、自身の見解をはっきりと

は主張しない。この部で特異的なのは、ヴェーダーンタ学派のシャンカラの不二一元論とスピノザの唯物論とを比較し、論じているところである。グルニエは、どちらかと言えば、前者のほうに共感する。そこから、本質的に非合理な世界で、「無―差異」や「絶対」が持つ意味とは何か、ヨーロッパとアジアの思想を行ったり来たりしながら論じている。

そして第三部「選択と主導権」では、人間が実践している行動そのものから、選択の基準や決定にかんして、自問し始める。グルニエは、「好むことは選ぶことではない」（*Ibid.*:94）とし、「選択において選択する対象以上に重要なのは、主体の態度だ」（*Ibid.*:98）と述べる。また、「決定には、自由と同様に絶対的なものは存在しない」（*Ibid.*:103-104）、「選択は、時を経て個人に結果をもたらすため、非常に重要である」（*Ibid.*:108）とも述べる。

つまり、本著全体を通して、グルニエは、「いずれにしても、好みでもないし確実でもないけれども、諸個人が「選択」しないことには、（グルニエが密かに追い求める）「無―差異」な「絶対」にすら至ることはできない（が、それが容易にはできない）」ということを言いたかったのではないかと考えられる。というのも、このような曖昧ともとれるスタンスは、他の著作においてもしばしばみられるからだ。グルニエは、カトリックの家庭に生まれ、自身もカトリックの信者であるのだが、そこで教え説かれている宗教的な絶対をそのまま信じることはできず、他の場所に「絶対」を追い求めるも、そこでは他人がそれを信じているがゆえに、私は信じることができなくなる。けれども、事実上選択権のない「受諾」を受け入れることもやはり到底できない。あらゆる束縛から解き放たれたいけれどもそれができないという、鬱屈とした、まさに現代人になるための「孤」の分裂を抱えている(3)。

3. グルニエの東洋志向（オリアンタリスム）

> インドの思想もまた、まったく新しい何物かをあたえるに十分なほど古いのである。（グルニエ 2019:103）

グルニエは、様々な著書を通して、インドについてたびたび言及してきた。哲学的エセー『孤島』（1933）には「想像のインド」という章があるし、グルニエの死後には『インドについて』（1994）という本も出版されている。

また『絶対と選択』第二版（1961）の「補遺」には、次のような記述もある。

> 存在の無―差異（アン ディフェランス）は、存在する者同士の愛と相容れないものではない。すなわち、「私は万物に対して平等である。私には憎むものも好きなものもない。しかし、信愛をこめて私を愛する人々は私のうちにあり、私もまた彼らのうちにある[(4)]」。（GRENIER 1961:119）

この部分では、ヒンドゥー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』第 9 章第 29 節が仏訳で引用されている。

では、ここで言われている「存在の無―差異」とは、いったいどういうことなのだろうか。

原語フランス語の「indifférence」は、グルニエやカミュのテクストにおいては、従来「無関心」あるいは「無関係」と訳されることがほとんどだったが、言葉を分解すると「無―差異 in-différence」と考えることができる。グルニエがこの言葉を用いるときも、この「無―差異」のニュアンスをも含意しているように思われる。

著書『人間的なものについて』（1955）の「無関心の試み」[(5)]という論考のなかで、グルニエはこの「無関心／無―差異」について考察している。

> 現存は過不足、多様性、微妙な陰影といった、要するに≪差異≫（différence）を含んでいる。なにものも他のものとの関連においてしか、それとの関係においてしか存在しない。≪存在≫は、それとは対蹠的に非・差異（non-différence）の領域であり、無関心の感情を生み出す源となる。（グルニエ 1986:74-75）

グルニエは「存在」は非―差異の世界、「現存」は差異の体験であると指摘する。そのうえで、「無関心／無―差異」の感情実体は、①無気力（アパシー）から、②エゴイズムから、③無偏向から、④希望から、⑤絶望から、⑥興味喪失から、の六つから生じるとし、さらに⑥は≪等価（エキヴァランス）≫の感情と≪不適合性（イナデクアシオン）≫の感情に細分化して論じている。

グルニエが注目する「無関心／無―差異」は、たとえば「いじめに無関心」や「政治問題に無関心」などにみられるような、「無興味」や「傍観」という意味合いではなく、宗教的な「悟り」や「達観」のほうの意味合いに近い。それは本書『絶対と選択』で仏教やヒンドゥー教が再三比較対象として挙げ

られていることからも明らかである。

> 興味喪失から生ずる無関心ははるか遠くまで、ギリシア的叡知が思いも及ばなかったほど遠くまで人間を導いていくことがある。というのも、この無関心は決して全的に世界に対する興味を失ったのではなく、その正反対だからである。（グルニエ 1986:83）

そしてこの「無関心／無―差異」は、カミュの思想とも関連している。この点については、次章で述べる。

一方で、グルニエは、古代中国思想の「道（タオ）」にも興味を示し、『道の精神』（1971）という本まで出版している。

「道」もまた、グルニエが繰り返し言及する「絶対」や「存在」に強く関連している。

> 「道」（Voié, Principe）とは、「一」にさえ先立つ未分化な宇宙的で生命的で精神的な力で、「踏破すべき道程であると同時にこの道程の終着点、方法であると同時に完成」であり、認識不能で没人格的な絶対者であり、「道」と呼ばれるとはいえ名を持つことがない。この究極の実在は「存在」（有）ではなく、様々な現出の背後に隠された「非存在」（無）なのである。（合田 2014:49）

グルニエは、本書『絶対と選択』のなかでも、「存在」と「無」について言及している。

> 存在とは無と同じような言葉に過ぎない。（43）[(6)]

この言葉だけを見ると、「存在」と「無」（「非存在」）があたかも同質であるかのような錯覚に陥る。そしてそれは、先のグルニエの考えを踏まえると、ここでいう「無」には「無―差異」のことをも含意されているとさえ思いたくなる。

しかしながら、グルニエは、こうとさえ言っている。

> 研究の行きつく先が「存在」であるか、「無」であるかは重要な問題ではない。（グルニエ 2019:131）

では、結局グルニエは、「無―差異」の言葉を使って、何が言いたかった

のだろうか。インドや中国の「非存在」に触れて、どこを目指していたのだろうか。先行研究に一つの答えがある。

> 結局、彼は自然に対する≪空虚≫から出発して、常に非人間的なものに関心を示し、遂には≪絶対≫absolu に到達しようとするのである。インドへの彼の関心は、インドの哲学思想が≪非人間的≫inhumain であるからなのだ。［……］このように自然の≪空虚≫、≪無関心≫から≪絶対≫に至ろうとするグルニエは、キリスト教的な神への道を辿らず、［……］Lao-Tzeu（老子）や、Taoisme（道教）に於ける≪無≫や≪絶対≫に近づき、一種の無神論的神秘主義に至つているのである。（片桐 1956:152）

片桐（1956）は、我が国においてグルニエの著作がまだほとんど紹介されていなかった 1950 年代後半に、グルニエの思想について詳細に論じている。

その先駆的な論考を踏まえれば、『絶対と選択』などにみられるグルニエの東洋志向は、先に述べたように、「絶対」に至るための、つまり「無―差異」に至るためのものだったと言える。そして、「存在」や「無」、「空虚」というのは、しかしながらグルニエにとって、新たな「無」（「非存在」）に接近するための、あくまでも出発点に過ぎなかった、とも言えるだろう。

4. 「無―差異」とカミュへの影響

カミュは、著書『シーシュポスの神話』（1942, rééd. 1945）のなかで、本書の初版にあたる『選択』を高く評価している。

> たとえば作品への無関心という点で不条理の論証の場合と似た結果に到達することがある［……］真の≪無関心の哲学≫の基礎付けをしている。（カミュ 2006:113）

またそのことは、カミュ―グルニエ往復書簡の「手紙 51」と「手紙 53」からも、窺い知ることができる（カミュ／グルニエ 1987:105-106, 107-110）。

したがって、『選択』あるいは『絶対と選択』とカミュの初期作品とはなんらかの相互の影響関係にあり、双方に登場する「無―差異」が鍵になって

いると考えられる。

カミュの作品における「無―差異」について、村岡（1988）は『裏と表』（1937）の「肯定と否定のあいだ」に出てくる母親（そのモデルは実の母親とされる）、グルニエ、ニーチェ、パスカルからの影響を踏まえて次のように言及している。

> この世の一切はたがいになんの差異もないということ。差異は人間が人間の利害に応じて勝手に定めたものにすぎない。無差異の境地に達した者は、永遠の真理のなかに、永遠のなかに生きている。その瞬間、彼にとって、時間はない。もはや誰も老いず、誰も死なない。もはやそこには肯定も否定もない。[……] すべては等しい。[……] パスカル的な「無人島」[……] カミュの思想の中心には、母親のこの無差異がある。（村岡 1988:33-34）

この文章は『シーシュポスの神話』で語られていた、非合理な世界に人間が切れ目を入れるところと重なる。そこにおける「差異」とは人間が生み出したものであり、そもそもの世界には差異がないように捉えることができる。その「永遠」とは「絶対」に近いものだろう。そこには、カミュの主題「アプシュルド absurde」(7)が関係しているように思われる。

カミュに拠れば「アプシュルド」とは、人間的で時に非人間的なものを分泌する思惟の主体と「何か」――世界でも自然でも神でも他者でも理想の自分でもなんでも――とのあいだで三項関係（トリニテ）を取り結ぶ絆のようなものである。「アプシュルド」は元来、思惟の主体の側にも美しい世界の側にもない。

要するに、「アプシュルド」は両側の二項から生じた「差異 différence」とも言える。そして、それがカミュの考える「生」の本質である。その思惟の主体が、たとえば＜わたし＞が生きている限り、この「アプシュルド」は消失しない。もし消失するとしたら、二項のどちらかがなくなるときであり、それはあり得ない。

しかし、同時に、カミュは「アプシュルド」が限りなくゼロに近いことが望ましいとも考えている。それは、ある種の「溶解体験」（作田 1993; 作田 1995）と言い表せられるような、自然≒世界≒（人格神や一神教の神ではない）神との合一であり、「無―差異」である(8)。

このモチーフを作品内で表現するとき、カミュはしばしば、「無―差異」という言葉を用いたり、再帰形自動詞を用いたりしている。

> ［……］ぼくは初めて自分を世界のやさしくやはり変わらない姿に開(ひら)けた。（CAMUS 2006:213）[9]

そのような、カミュの「indifférence」は、たしかに従来「無関心」と訳されてきた通り、「来世への無関心」（粟国 2014:72）を意味しているが、同時に、最終的には行為の無限反復によってすべてが「特権的瞬間」となるような[10]、そして「いま―ここ」すら消失され得るような[11]「無―差異」をも意味している。それゆえに、カミュの思想には「明日はない」し、「より多く生きる」ことが良いとされる。そして、その象徴としてシーシュポスが持ち上げられる。

つまり、カミュは、生きている以上「アプシュルド」から逃れられないけれども、それと向き合い続けるためには、経験の質の良し悪し関係なく、ただただ純粋に、そしてひたすらに行為を繰り返すことで、現実では体験し得ないような、死んでいるのに近いような「アプシュルド」のない世界との合一や結合に至るという一見矛盾しているように思われる姿勢を良しとした（それゆえに、『シーシュポスの神話』は逆説で展開されているし、それはカミュ自らが「不条理な論証」と名づけていることからも明らかである）。

本稿第 3 章で確認した通り、グルニエには「絶対」への志向があった。その姿勢が、教え子であるカミュに自然への合一や結合志向に影響を及ぼしたとしたら、あるいはカミュの自然観に「無―差異」が関係しているとしたら、我々はいわゆる「実存主義」の系譜を今一度再考する必要があるのではないだろうか。事実、カミュはグルニエの著書『孤島』を読んだことをきっかけに作家業を志すようになる（グルニエ 2019:13）。「個人主義的」と言われ、一括されてしまったカミュやグルニエの思想は、およそそれだけでは説明がつかないように思われる。

興味深いことに、本書『絶対と選択』でグルニエは次のように述べている、

> 自然は無(アン)―差異(ディフェランス)の領域である。（42）

他方、このグルニエとカミュとの相互の影響関係について、片桐（1956:153）

は「カミユには、グルニエのような東洋的な神秘主義への嗜好は全くない」と述べているが、この主張にはカミュの『手帖』を根拠に疑問を持たなければならない。

なぜなら、カミュが『*Absurde*』と題した本(12)の執筆を企図した当初、そこではアンドレ・マルロー論やインド思想を中心に扱う予定だったかもしれないことが、1936 年 5 月付の記述から推察できるからだ（カミュ 1992:30）。

もしカミュにも東洋的な神秘主義があったことを立証できれば、グルニエとの思想的なつながりもはっきりしてくるだろう。

5. 結びに代えて

本稿では、ジャン・グルニエの著書『絶対と選択』（1986）を取り上げた。

結びに代えて、わたしは皆さんにお詫びしなければならないことが二つある。

まず一つ目に、わたしの語学力や技量不足で、本書の細部を検討することが叶わなかったことである。グルニエの文章は、多くの哲学的知識を前提とし、かつグルニエ本人は自らの考えをあまり強くは主張しない。そのために、本書の読解は困難を極め、わたしがグルニエの意図を正確に把握し、皆さんに伝えられているか、非常に怪しいところがある（もっとも、その文章の難しさがグルニエの思想を特異なものにしていることは間違いないのだが）。

二つ目に、グルニエとカミュとの相互の影響関係にかんして、「無―差異 indifférence」をキーワードに論じたが、論として強固なものになっているとは言い難い。これにかんしては、また稿を改めて詳しく論じる予定である。

以上が、本稿からの課題であり、現時点でのわたしの限界である。

この拙い書評から、ジャン・グルニエという（言ってしまえば）マイナーな哲学者の魅力と謎が読者の皆さんに少しでも伝わり、グルニエ研究やカミュ研究の一助になれば幸いである。

最後に、カミュ『シーシュポスの神話』の有名な冒頭を引用して、本稿を閉じたい。

> 真に重大な哲学上の問題は一つしかない。自殺ということだ（カミュ 2006:12）

本書のように断定的で強気な物言いから始まり、時折右往左往、逡巡しながら自分の信念を論じていく態度は、思えばそれは、グルニエの姿勢そのものであり、グルニエに対するカミュなりの敬意でもあったのかもしれない。

注

(1) 引用の日本語訳は筆者による拙訳である。以下、括弧内のアラビア数字は、それだけの場合は、原著の頁数あるいは原著の刊行年を示す。また傍点は、原著においてイタリック体で表記されていたことを示す。ここに「距離感」と訳した語は、フランス語原語では« écart »であり、「隔たり」とも「差異」とも読み捉えることができる。また、「我々はこの世界内に存在しない」は、第三版原著の註釈にある通り、ランボーの言葉である。具体的には、詩『地獄の一季節』「錯乱 I　愚かなの乙女」の「地獄の夫」にみられる言葉である。また、グルニエと同時代のハイデッガーを意識しているようにも思われる。ちなみに、レヴィナスは『全体性と無限』（1961）の冒頭において、ランボーの詩の同じ箇所から形を変えて引用している。

(2) 絶版。『選択』は、フランスでは電子データで販売されているが、日本国内からは購入不可。我が国の公的機関では岡山大学附属図書館津島中央図書館に唯一所蔵されている。今回、本稿を執筆するにあたり、現物貸借の取り寄せ申請を行ったが、貴重かつ資料の経年劣化が激しいため利用不可との回答があった。

(3) グルニエ 1990『X の回想』（大久保 敏彦訳、国文社）所収の「心の揺れ」を参照すると、「絶対」や「選択」に対するグルニエの問題意識、そしてなぜグルニエがインドの思想に向かっていったのかが、よりクリアにわかる。

(4) 鍵括弧内は、不詳 1992『バガヴァッド・ギーター』（上村 勝彦訳、岩波文庫）p.84 からの引用である。

(5) 1945 年、グルニエが編纂のアントロジー『実存』に掲載された論考に基づいている。また、この企画に先立って、1943 年の初め頃にグルニエがエセーの企画を持ちかけたことをきっかけに『ピリュウスとシネアス』（1944）を書き上げたとボーヴォワールは『女ざかり』（1960）で回顧している（ただしボーヴォワールは『実存』には寄稿していない）。

(6) 「存在」と「無」と言えば、サルトルの著書『存在と無』（1943）を彷彿とさせるが、「無」を生み出す「対自存在」との関連性も気になるところである。

(7) 通常« absurde »は「不条理」と訳されることが多いが、本稿においては、その語の持つ多義性とカミュの意図を踏まえ、原音表記の「アプシュルド」とした。

(8) 陶淵明のモチーフ「真」に似ているようにも思われる。「真」の根底には、「物我一如」（「梵我一如」とは似て非なるもの）がある。

(9) 筆者による拙訳。これは小説『異邦人』（1942）のラストシーンである。このシーンは「無―差異 indifférence」のモチーフが表れている箇所である。原文は、« [...] je m’ouvrais pour la première fois à la tendre indifférence du monde. »

（CAMUS 2006:213）であり、従来の邦訳では三種すべて「わたしは世界の無関心に心／自分を開いた」というふうに訳されてきた。

(10) 「特権的瞬間」は、カミュ研究者の竹内（2011:25）に拠れば、「必然的に非特権的瞬間を前提とする。つまり、瞬間の価値の差異を認めるのである」。

(11) 「いま―ここ」は、過去の「あのとき―そこ」や未来の「いつか―そこ」を前提としているとも言える。

(12) のちの『シーシュポスの神話』である。

参照文献

粟国 孝 2014『アルベール・カミュ研究：不条理系列の作品世界』大学教育出版。

片桐 邦郎 1956「アルベエル・カミユの思想と風土について：（ジャン・グルニエとの比較による一考察）」、慶応義塾大学藝文学会編『藝文研究　第 6 号』pp.148-160。

カミュ／グルニエ 1987『カミュ＝グルニエ往復書簡：1932-1960』大久保 敏彦訳、国文社。

カミュ、アルベール 1992『カミュの手帖［全］1935-1959』大久保 敏彦訳、新潮社。

カミュ、アルベール 2006『シーシュポスの神話』清水 徹訳、新潮文庫。

グルニエ、ジャン 1986『人間的なものについて』大久保 敏彦訳、国文社。

――― 1990『X の回想』大久保 敏彦訳、国文社。

――― 2019『孤島』井上 究一郎訳、ちくま学芸文庫。

合田 正人 2014「ジャン・グルニエ」、『思想史の名脇役たち：知られざる知識人群像』河出ブックス、pp.18-60。

作田 啓一 1993『生成の社会学をめざして：価値観と性格』有斐閣。

――― 1995『三次元の人間：生成の思想を語る』行路社。

竹内 修一 2011『死刑囚たちの「歴史」：アルベール・カミュ『反抗的人間』をめぐって』風間書房。

不詳 1992『バガヴァッド・ギーター』上村 勝彦訳、岩波文庫。

村岡 正明 1988「カミュの「無差異」について」、城西大学経済学会人文研究編集委員会編『城西人文研究　第 16 巻第 1 号』pp.27-45。

CAMUS, Albert. 2006. *L'Étranger*, Paris : Éditions Gallimard, 1942. ; *Œuvres complètes　I 1931-1944*, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », Paris : Éditions Gallimard., pp.139-213, 215-216.

GRENIER, Jean. 1961. *Absolu et choix*. Paris : Presses Universitaires de France (P.U.F.).

----, 1986. *Absolu et choix*. Quimper : Calligrammes.